[chapter：三：なんてこと！？　捕まっちゃった！？　貞操の危機！？]

一応、言い訳させてもらおう。

反応は出来ていた。対応が間に合わなかっただけで。

……ええ、そうですよ。結局捕まっちゃいましたよ。

目を覚ますと、あたしは見知らぬ工場跡？にいた。

そして、両手を縛り上げられ、天井から吊り下げられていたのだ。

一応、タマゴロモだけは身に着けていたが、背嚢（バックパック）や外套（マント）などの諸々は外されている。

当然、付属する銃器や刃物もない。

上下左右を見渡すと、やはり工場跡のようだ。荒夏事変の時にでも破壊され、そのまま放置されたのだろうか？　半壊しており、雨露程度は防げるが、日光は差し込み、外気も流れ込んでくる。

（タマゴロモだけが残されているのは、北海道の寒さを防ぐため、あたしに衰弱死されると困るので、必要という判断なのだろう）

当然のように人気もない。叫んでも無駄だろう。

何より、目の前に、例のアバーヤ女と、ヘルメット男がいた。

もっとも、今の二人は素顔をさらしているので、アバーヤ女、ヘルメット男と呼ぶのは相応しくないかもしれない。結局あたしは『気配』で判断しているし。

そう、異形の細胞で顔が半ば覆われている若い女――シージンと、

ヘルメットの下は意外と優男な――多分、例の『阿久津』だった。

シージンは問いかけてくる。

「目が覚めたか？」

「……」

「あっけなかったな。汀嬢と違って、懐に入ればなんとかなるとは思っていたが、こうも上手くいくとは思わなかったよ」

シージンはニヤニヤと笑う。

一見、自分の実力に酔っている様に見えるが、……多分違う。こちらの戦力を把握するため、鎌をかけているのだろう。

「しかし、今日は実際どうしたんだ？　懐に入った後の動きも鈍かったが、そもそも懐に入られるまで気付かないというのは？　キャロット嬢の記録を分析した時には、かなりの

遠距離からでも生体反応を探知できるものと覚悟していたよ。いわゆる『精度』は汀嬢が上だろうが、『射程』はキャロット嬢が上だろうとね……」

「……」

あたしは無言で戦慄していた。

――この連中はあたし達を分析し切っている……！

……一応、あたし自身も同じ仮説を立てていた。

この際、ネタばらしさせてもらう。

色々伏線があった通り、あたしには電磁波（主に地磁気の類）を感知する異能がある。

そして、この力を専用に調整されたタマゴロモで機械的に増幅する事で、人間や異形の接近や行動を一定察知できる。だからこそ、あたしは戦場で好き放題できたのだ。目では見えない敵の位置を『直感的に』把握できる――この戦術的恩恵は語るまでもないだろう。おまけに、あたしは通常の射撃技術にも卓越しているから、尚の事である。

しかし、汀は違うらしい。

あたしも汀も『ちょっと異常なカンの良さ』を誇るのは同じだ。多分、あたしと同じで、見えない敵の位置を『直感的に』把握できるだろう。だから、汀も戦場で好き放題できた。ただ、その原理はあたしとは異なるという。汀自身がそう明言している。だから、昨日はあたしが感知できた異形の存在に気付けなかったらしい。

シージンによると、あたしと汀は共に気配察知の異能を具えているが、射程においてはあたしが勝り、精度においては汀が勝るという。なるほど、言われてみると、そんな気がしてきた。……だから、あたしが『銃器』と遠距離でも使える武装を主とするのに対して、汀は『刀剣』という近距離でしか使えない武装を主とするのか？

――でも、現代戦で日本刀振り回しているのは絶対に趣味だよなー。

とはいえ、今考えるべきはこの連中の分析力だ。

実際、シージンの指摘は非常に的確である。つまり、あたしと汀の戦力を、あたしと汀以上に理解しているのだ。このシージンが（不調だったとはいえ）あたしと汀を出し抜く地力を持っている事は既に実証済みだ。だが、このシージンが本当に恐ろしいのは、この分析力かもしれない。

その上、シージンには意外と下品なところがあるらしい。

「もしかして、あの日か？」

シージンはそう言ってにやにやと笑い、阿久津は少しきょとんとした後、頬を染めた。

――おいおい、男の純情に価値なんてなねーぞー。

あたしは内心ウンザリしていたが、口に出すのはやめておいた。すると、

「まあいい。本題に入ろう」シージンは鋭い視線をあたしに向ける。正直、ちょっと怖い。

「盗んだ大型の結晶細胞はどうした？」

「……やっぱり、あれが本命だったの？」

あたしは初めて口を開いた。

「とっくに気づいていたんだろう？　だから、自分ではなく、汀嬢に持たせたんだろう？」

そう、あたしはあの結晶細胞を持っていない。あれは今朝から汀に預けていたのだ。

……でも、シージンの言い方だと、あたしより、汀の方が腕が立つみたいだなあ。

とはいえ、たしかに装備・技能の両面で、汀の方が『何かを守る』事に向いているとは思う。精神的にも、あたしが攻性の人間であるのに対し、汀は守性の人間である。それは、短い付き合いでも明らかだった。

……もっとも、本当の理由は、あの結晶細胞がちょっとかさばる上に、かなーり重い（何と金属並みの比重だった）から、汀に持ってもらっただけなのだが……。

「で、その汀嬢と大型の結晶細胞は今どこに？」

「……」

あたしは再び沈黙した。実際、知らないのだ。こいつらが手に入れていない以上、汀が持っている事はほぼ確実だが、その汀がどう行動するかまではわからない。

同時に、あたしは記憶を整理し、シージンの言動と突き合わせ、ひとまず安心した。

汀は無事だ。

前後の状況からの推測になるが、このシージンはあの結晶細胞を狙って、あたしを誘拐した。それが当初からの計画だったのか、あたしが不調だったからの咄嗟の判断なのかはわからない。しかし、その現場には汀がいたのだ。当然、汀の妨害が入るだろう。そう、相手はあの汀なのだ。このシージンの実力がいかほどでも、あたしを抱えたまま、戦えるはずがない。あたしの確保を優先し、汀を放置したまま、即時離脱したはずだ。あるいは異形を足止めに使ったかもしれないが、それでやられる汀ではない。

一方でこのシージンも、汀が件の大型結晶細胞を持っている事は、消去法的に確信しているのだろう。

何しろ、ヒトの頭ほどの結晶細胞だ。そう簡単に隠せる大きさではない。

そして、あたしの身ぐるみを剥いで、タマゴロモ一丁にしているのだ。あたしの荷物にそんな結晶細胞がない事は確認済みと見ていい。加えて、タマゴロモは裸同然のぴっちりスーツだから、服の下に隠すことも不可能だ。

いや待て。

……考えてみれば、今のあたしって無茶苦茶色っぽいんじゃ？

繰り返すが、タマゴロモだけだと身体の線は丸出しになる。あたしがいつも外套（マント）を身に着けているのは、あれが一種の防弾繊維であると共に、タマゴロモと接続することで外部拡張検出装置（センサー）として機能するからだが……単に下着同然のタマゴロモ姿だと目立ち過ぎるからでもある。

逆に言えば、色仕掛けの時はタマゴロモ姿になるのが常だった。

このタマゴロモ姿はあたしの肢体の婉然さを全裸以上に強調するのだ。

しかも、今は両腕を縛られ、天井から吊り下げられ、その艶美を隠す事も出来ない。

そのせいかだろうか？

「なるほど、だんまりね……」

と、シージンはやれやれといった様子で、どんでもない事を言い出す。

「仕方がない。阿久津、この娘を犯せ」

「は？」

「えええええええ」

これには阿久津に続いて、あたしも思わず声を上げた。

「あの、アネさん、犯せ――というと？」

「強姦しろと言っているんだ。口を割らせるために」

「え……と……」

「お前は物分かりが悪いな。男なら普通に痛めつけるどころだよ。しかしな、若い娘で、これだけの器量よしだ。見栄えが悪くなるような傷を付ければ、後で売る時もったいないだろう？」

何故か、シージンは流し目で阿久津に語っていた。

いやいやいや、だがちょっと待って欲しい。

あたしは処女（おとめ）だよ！

ここで手を出せば、市場価値が下がること間違いなし！　だから、強姦とか陵辱とか、そういうのやめようね！

……と、あたしは激しく言ってやりたいが、それでこの阿久津という男が『え、マジ？いやあ、実は俺、処女厨なんですよ。じゃ、いただきまーす』とされても困る。だから、かろうじて黙っている。

しかし、その阿久津は何故か左右を見渡した。そして曰く。

「あの、ここで……ですか？」

「なんだ？　男なら役得ではないのか？」
シージンは意外と可愛らしく首を傾げる。
「見たところ、この赤毛娘、病気持ちという訳でもなさそうだし」
だからあたしは清純可憐な**処女**（おとめ）なんだって！
汚れを知らず、花も恥じらう十五歳なんだって！
……と言えないこの身が辛過ぎる！
「アタシとしては報酬のつもりでもあるんだがな。実際、お前には感謝しているから」
「……！」
シージンの『お前には感謝しているから』の言葉に、阿久津はさらに頬を赤らめた。が、今度の彼ははっきり首を振って、問い返す。
「でも、強姦って……アネさんの前で、ですよね？」
「何か問題が？」
「いや、だって、でも……」
阿久津は『上司に言ってはいけない単語』を三連発してまで躊躇する。
一方、シージンはしびれを切らしたのか、あたしの方を向いて言う。
「ま、お前は嫌なら仕方がない。アタシが犯すさ」
えええええええ！
「えええええええ！」
あたしの心に応えるように、阿久津も大声で驚いた。
「あの、アネさん、経験あるですか？」
「強姦した経験？　あるわけがないだろう」
シージンはけろりと言った後、舌なめずりをする。
「しかし、代案もないし、何事も経験だ。ここは一つ挑戦してみようと思う」
そして、シージンはあたしに近づいてくる。
――い、いやだー。あたし、初めては好きな相手って決めているんだ――。
あたしは内心絶叫、顔面蒼白になる。
同時に、阿久津が意を決して、シージンの前に立ち塞がった。
「あ、あの、アネさんっ！」
「ん？　どうした？」
「アネさん……！　俺が自白剤を手に入れてきますから……！」
「自白剤？　そんなもの実在するのか？」
「厳密な意味ではともかく、似たような効能の薬なら、俺でも手に入れれますって」

そう言って、阿久津は「ねっ、だから、強姦はやめておきましょう。物事はスマートに進めるべきですよ……！」と何故か必死にシージンを制止する。

――……この阿久津という男、もしかして、このシージンとかいう女に惚れているのか……？

いずれにせよ、阿久津の説得であたしの貞操はひとまず守られたのだった。

＊＊＊

そして夜になった。

体力温存のためにも睡眠をとりたいのだが、天上から吊り下げられているので、熟睡は難しい。時間の経過で生理が終わった事だけが救いである。

それでも、一応目は閉じていたのだが……、

いきなり気配があらわれる。

「……！」

目を開けると、シージンが一人であたしの前に立っていた。

「事情が変わった」

「は？」

「静かにしていろ」

シージンは有無を言わせず、己の腰から短剣（ダガー）を抜刀する。

白刃が一閃し、あたしを吊り下げている縄を両断する。

「わっ……」

あたしもそのまま落下していなければ、感心していたのだろう。比較対象が汀になってしまうので、目立たないがシージンの技量は大したものだ。

そして、あたしはなんとか両足で着地する（両手は縛られたままなのだ）。

「おまえの荷物だ」

次にシージンはそう言って、外套（マント）に包まれた背嚢（バックパック）を渡してきた。うん、あたしのだ。

あたしはまず背嚢（バックパック）から小刀（ナイフ）を外して、両腕を結ぶ縄を切る。

さらに背嚢（バックパック）を漁って、予備の頭冠（ヘッドセット）を取り出す。ヘッドセットとはいうものの、細身で軽量で小型なので、あたしの長髪の下に潜り込ませると、ほとんど見えなくなる。もっと言えば、一見装飾品の様だ。

だが、この頭冠（ヘッドセット）は装飾品どころか、単純な通信機器ですらない。

キャロット・マリオンというシステムを完成させる要（かなめ）なのだ。

あたしはタマゴロモの脊髄部と外套（マント）と頭冠（ヘッドセット）を有線接続。数秒待って同期を確認すると、目を閉じて、額を指でつつく。まあ、最後のおまじないの様なものだが……それで一気にあたしの『感覚』が広がった。

――よし、機能正常。

こういった機械的な補助がなくても、あたしの『直感』が機能しないわけでもない。が、やはりぼやけた感じになってしまう。だから、視力の弱い人間は眼鏡で矯正するように、あたしも増幅装置（ブースター）で『直感』を補助するのだ。

「なるほど、やはり、それはそう使うのか」

シージンは感心したように言った。

「わかっていたから、最初に外套（マント）と一緒に取り上げたんじゃないの？」

「確信はなかった。最初にお前が着けていたヤツは半透明で、頭部にそんなものを付けている事自体、見逃しそうになったからな」

「そういうのを隠すための長髪でもあるのよ。まあ、予備のこれは機能的には同じでも、目立つから装飾品と言う事で乗り切るしかないけどね」

「構わんさ。似合っているしな」

「ありがと。それより、どういうつも……」

そこであたしの感覚野に新しい反応が出た。

「待って……誰か来る」

「ちっ、隠れるぞ……」

「無理よ。明らかに向こうは気付いている」

あたしが銃を抜こうした瞬間、シージンはがその腕を掴み、首を振る。「ここでの撃ち合いはマズイ」ということらしい。

シージンが謎の気配に向かって言う。

「阿久津か？　すまん、ここは見逃せ」

「あらあら」

その声には聞き覚えがあった。シージンの顔色が変わる。

「これはどういうことです？」

声の主は……あの【紅玉の杏（あんず）】だった。

さすがに服は着替え、ビジネススーツとミニスカートの組み合わせだったが……、少し癖がある瑞々しい黒髪の肩までのお下げも、分厚い黒ぶちの眼鏡も変わっていない。二つ名の由来である紅玉も、豊かな胸の谷間で、相も変わらず輝いている。

しかし、そんな柔和な杏の顔に――。

シージンは震えていた。
「逃げるぞ……」
そして、シージンは小声でだが、はっきりと言う。
「はあ？」
「こいつに勝てるわけがないないだろう……！」
あたしは意味がわからなかった。
何故、【紅玉の杏（あんず）】がここにいる？
何故、【紅玉の杏（あんず）】から逃げねばならない？
そして――何故、【紅玉の杏（あんず）】にシージンはこうも怯えているのだ？
「うふふ。逃げられると思っているんですか？」
そう言って、杏は柔和に微笑んだ。
……シージンの実力はあたしも認めている。少なくとも、近接戦闘能力なら、あたしを上回り、下手をすれば、あの汀にも匹敵するかもしれない。
そんなシージンが明らかに、怯え震えていた。
「ねえ、シージンちゃん、もう忘れちゃったんですか？　――シージンちゃんが私の玩具だってこと」
「黙れっ！」
シージンは持っていた短剣（ダガー）を杏へと投げつける。
だが、次の瞬間、『何か』が杏を庇い、その短剣（ダガー）を叩き落とした。
――え？　今のって……？
あたしは混乱していたが、シージンには予想通りだったらしい。ほぼ同時に左手で手榴弾を投げつける。やはり『何か』――いや、今度は見えた。
あれは異形の触手だ。
どこからか伸びたそれが杏を庇い、手榴弾を叩き落とす。
だが、それは通常爆薬ではなかったらしい。
手榴弾は炸裂すると、煙幕を掃き出す。
その煙幕が視界を覆い尽くす前に、シージンがあたしの首根っこをひっ捕まえた。
そして、あたしはシージンに引きずられる形で、工場跡を脱出したのだった。

＊＊＊

ほとんど付き合いで、野山を駆ける事、約二十分――。

「追手はっ？」
シージンは焦りを隠さずに、あたしに尋ねてきた。
「い、いないよ……！」
あたしは正直に答える。
「今、『感覚』を全開にしてみたけど、少なくとも半径二キロ以内に人間の反応も異形の反応もないわ」
「しっかり探せ！　お前だって、あの女の玩具にはなりたくないだろうっ！？」
「だから、脱出直後から、あたしは気配察知に全力全開だって！　でも、追手の存在自体、確認できない。――ねえ、そもそも準備もなしにこんな山中まで追いかけてくる？　下手すれば、あたしたちだって遭難なのよ」
「そ、そうか……？」
「そうよ。こんな山中じゃ、車は使えないし、異形で捜索するにしても、効率が悪過ぎる。あたしたちを追跡するにせよ、一度準備を整えるはずだわ」
「そ、そうだな……」
あたしの理詰めに対し、シージンは気弱に頷いた。
――というか、それを狙ってこの逃走経路を選んだんじゃないの？
辺りを見渡せば、やはりミズナラなどの落葉広葉樹だ。その他の植生や移動時間からも考えて、ここは北海道の山林なのだろう。そこを二十分も走り続け、半径二キロ以内には反応もない。
ひとまずではあるが、追手はない――と考えていいはずだ。
すると、シージンはふらふらと歩き出す。
「ちょ、どこ行くのよ」
「そこに川がある。水を飲む」

＊＊＊

シージンは獣のように四つん這いになって、小川の水を飲み出した。
「……」
あたしが川中の石をどかしてみると、ザリガニやエビがいる。
――まあ、これなら、そのまま飲めないこともないだろうけど……。
シージンがいきなり水を飲み出した理由は別にあるはずだ。
「ねえ、あなたほどの人が何を怯えているの？　あの杏とかいう女がなんだっていうの？」

あたしの言い方はやや挑発的だったはずだ。
しかし、シージンは水を飲むのをやめ、悲しげに語る。
「怯えもするさ。あいつは……【紅玉の杏（あんず）】だからな」
「いや、それはあたしも昨日会った時に聞いたわ」
「ほう、先に接触済みか。なるほど……」
シージンは皮肉気に呟いた。
「この際だ。事情は一通り話してやるよ。何が聞きたい？」
「まずは……そうね。あの【紅玉の杏（あんず）】って、本物なの？」
「ああ、正真正銘本物さ。飛天市攻略戦で医者の鑑（かがみ）と言われた【紅玉の杏（あんず）】ご本人だ。世間じゃ聖女様扱いだが、あれがあの女の本性さ」
「それじゃよくわかんないんだって。まあ、あの人、昨日と今日で雰囲気違ったけど……裏で何かやっているの？」
「そうだな。具体的には……」
シージンは自分自身の身体を指差して言う。
「アタシをこんな身体にした」
「こんな体？」
「見ればわかるだろう？」
「いや、それがただの全身甲冑式異形じゃないのはわかるわよ。さしずめ、『部分甲冑式異形使役者』とでもいうところ？」
「いや、あえて言えば、『融合式異形被験者』だよ」
「融合式？　被験者？」
「要は全身甲冑式異形使役者の意図的なできそこないだよ。通常の甲冑式から、『甲冑を着脱するような可逆性』を取り除いた上で、異形細胞に臓器機能の一部も代替させている」
「それって……」
「ああ、今のアタシはもうヒトの姿には戻れない」
シージンはとんでもない事をあっさり告白した。
「可逆性を取り除いてまで……追及したかった性能があるっていうの？」
「いや、アタシは実験動物だよ」シージンは歪んだ笑みを浮かべる。「そんな上等なものでもない。部分的にはともかく、総合的には通常の甲冑式異形に遠く及ばない」
「は、はあ？」

あたしは納得しつつも混乱した。

たしかに今までに見たシージンの『性能』はかなりのものだが、甲冑式異形使役者ほどではなかった。

だが、そうすると、この『融合式異形被験者』＝シージンの存在意義は何なのか？

「ヒトに戻れないというだけで、社会的な展開能力が著しく下がるでしょ。なのに、総合力でも劣るなんて、どんな意味があるのよ。第一、甲冑式異形から着脱機能を取り除いたなら、その分、ペイロードには余裕ができる。だったら、それだけでも性能向上しなきゃおかしいじゃん」

「それは技術的には正しいが、経済的には誤りだ。パソコンとワープロみたいなものだな」

「パソコン――パーソナルコンピューターはともかく『わーぷろ』って何？」

「ワードプロセッサの略」

「文書処理？　タイプライターか何か？」

「いや、さしずめ、文書処理専用パソコンだ。そのタイプライターとパソコンの過渡期に一瞬だけ流行ったそうだ」

「文書処理専用パソコン……あ、初期のパソコンは性能が低くて、マルチタスクがこなせなかったと。で、文章処理に特化したパソコンが作られた。けど、パソコンの性能が向上すると、他のソフトも入れる余裕ができた。だから、その『わーぷろ』とやらは廃れたと？」

「それに加えて、通常のパソコンの文章処理能力がワープロを上回るようになったしな」

「その理由が技術ではなく経済にあるってわけね」

「そうだ。パソコンの需要はワープロより大きかった。だから、パソコンの開発にはより多くの開発資金が費やされ、より多く開発競争が行われ、より多くの技術成果を上げた。しかし、ワープロの需要は少なかった。開発資金、開発競争、技術成果も少なかった」

「だったら、文書処理をしたい人もとりあえずはパソコンを買って、その向上した性能で必要な時だけ、『ワープロソフト』を使えばいいと？」

シージンは頷く。……もっとも、彼女にすれば、自分の身体の事のはずだ。

「甲冑式と融合式も似たようなものだよ。純技術的に考えれば、融合式の方がやはり性能向上の余地は大きいだろう。だが、融合式には需要がない。第一、甲冑式ですらオーバースペックと言われているんだぞ」

「でもそうすると、【紅玉の杏（あんず）】はなんのためにそんな事を？」

「知るか」

シージンは吐き捨てるように言った。

＊＊＊

「阿久津に言わせると、事前実験の一つだそうだ。実際、アタシの融合記録は異形細胞の人体医療にも応用できるらしいしな。……もっとも、アタシに言わせれば、あの女がイカれているだけだがな」

異形細胞の人体医療への応用――というのは杏自身の口から出た言葉と一致していた。

「待って。その阿久津は何者なの？」

「あいつは……アタシと同じさ。杏に拾われた男だ。杏の助手の様な事もやらされていた。だから、自律式異形の扱いも慣れている」

言われてみれば、思い当たる節がある。もっとも……。

「阿久津はあなたを慕っているようだったけど？」

「ああ、アタシのリハビリ以来、ずっと一緒だったしな。気弱な男だが、ウマもあった。……ま、こんなカラダでもなければ、寝室に誘ってみようかと思うぐらいではあったよ」

……そこは過去形なんだ？

と思ったが、これはちょっと話が入り組んできた。

「ごめん。あたしが持っている情報が断片的なせいで、混乱してきた。一言でまとめると、『あなたも阿久津も【紅玉の杏（あんず）】の下で働いていたけど、あなたは離反した』という事でいいの？」

「その通りだ」

「荒夏復活は？」

「なんじゃそりゃ？　アタシの目的はあの【紅玉の杏（あんず）】への復讐だよ」

「……悪かったわ。時系列順に説明してくれない？」

「ああ、わかったよ」

シージンは面倒臭そうだが、情報の出し惜しみはしなかった。

「名前からもわかるだろうが、アタシは生粋の日本人じゃない。いわゆる不法移民だよ。なんでそうなったかは省略するが、まあ、『存在しないはずの人間』として、この国では酷い環境で働かされていた。ところが、ある時、人権団体だが、排外主義組織だか――《蓬莱会》だったかな？――が、やってきて、告発したんだ。『この職場は労働基準法に違反している！』ってな。……まあ、たしかにその通りだったよ。そこは職場というより家畜小屋で、アタシらは奴隷同然だったからな」

「……」

「それで強制送還という流れだったんだが――その直前に行われた健康診断で、アタシの病気が見つかった。それも内臓にな」

「それを見つけたのって……？」

「ああ、文月杏だ」

「その病気、実在したの？」

「あの女の捏造――と思いたいところだが、実際のところはわからんな。当時のカルテはその後のゴタゴタで失われているし、当時は研修医だった杏に病気をでっちあげれたかは怪しい。いずれにせよ、いきなり強制送還はできなくなった。杏が保証人になる条件で、あたしは日本で治療を受けられることになった」

「文月杏の保護の下で……？」

「そうだ。そして、手術のために受けたはずの全身麻酔から、目覚めるとアタシはこんな身体にされていた」

「……」

「騙された――と気付いても、もう遅い。移植された異形細胞が『馴染む』までの一年はろくに動けなかったし、元々、アタシはこの国に『存在しないはずの人間』で、その頃、あの女はもう【紅玉の杏（あんず）】として、名を上げていたからな」

「仮に告発してもよくある誹謗中傷の一種として処理されるのがオチ――というわけね？」

「そうだ。特にその頃はまだ荒夏事変直後の混乱が続いていたし……」

シージンはそこで少し言い淀む。

「いや、正直に言えば、あの頃のアタシはあの女への恩義を多少は感じていたんだろうな。命を救ってもらったっていう……。実際、昔の杏はあんなんじゃなかったという奴もいる。今思えば、怪しいもんだがな」

うーん、これは暗い上に込み入った話だなー。

あたしはつい癖で、耳元の髪を摘まむ。そこで、自慢の赤毛が油っぽくなっている事に気付いた。

「……そのまま話を続けて」

そう言って、あたしは裸になる事にした。外套を外し、タマゴロモを脱ぐ。

「何だいきなり？」

「いや、続きはその小川で水浴びしながら、聞こうかと思って」

「おい、周辺の気配察知は？」

シージンはさすがに眉を顰めたが、あたしも譲らない。実際、後々のためにも必要な事だった。

「あたしは生理中に襲われて、それからずっと天井から吊り下げられていたの。こんなに不衛生だと、探査精度にも悪影響が出るわ。精神的な問題かもしれないけど、衛生水準は保たないといけない」

「……わかった。風邪を引かないようにな」

シージンの指摘通り、あたしが入った小川の水はびっくりするほど冷たかった。しかし、我慢して肩まで入る。

あなたは入らないの？――と口にしようとしてやめた。

彼女も異形細胞に犯された身体を見せたくはないのかもしれない。

「……」

あたしは何と言葉をかけるべきかわからず、また話を変える。

「……ＡＨＡは？　【紅玉の杏（あんず）】は、【対《荒夏》同盟（Anti Huang-xia Alliance）】＝ＡＨＡ所属だったと聞いたけど？」

「ああ、昔の杏と第一期ＡＨＡは蜜月だったらしいな。荒夏事変中は医者も貴重だったし、当人も猫かぶって医療行為に専念していたから、第一期ＡＨＡは杏を問題視はしなかった。ついでに若くて美人で一見献身的な【紅玉の杏（あんず）】は聖女として広報上便利に使われた。……で、第一期ＡＨＡが杏の危険性を認識した頃には、もう切るに切れない状態になってしまったらしい」

「今は？」

「第二期ＡＨＡ側が杏と距離を置いているって感じだな。第一期ＡＨＡと第二期ＡＨＡは構成員に重複も多いから、杏の危険性は認識されている。元々、杏は荒夏からＡＨＡへの典型的な寝返り組だし、昔ほど医者の需要はない。縁がすっぱり切れているという訳でもなさそうだが、【紅玉の杏（あんず）】が第二期ＡＨＡを顎で使うとか、逆に【紅玉の杏（あんず）】が第二期ＡＨＡの命令で動いているという事もないだろう」

「じゃあ、【紅玉の杏（あんず）】側の勢力は彼女の私兵が中心なのね？」

「そうだ。昨日までのアタシや阿久津みたいに、杏に逆らえない人間が中心だよ。まあ、本気で心酔している奴らもいるがな」

あたしは少しひっかかった。シージンは、阿久津を杏に逆らえない人間であると言った。つまり、阿久津にもシージンのように杏に逆らえない理由があるのか？

そこでふと気付いた。

「あなたは杏が単にイカレているという意見だけど、阿久津によると杏がやったのは事前実験の一つなのよね？　じゃあ、彼が想定している杏の最終的な目的って？」

「詳しくはわからんが、《異形》の力にさらなる追及――だそうだ」

「そのために【紅玉の杏（あんず）】は、美名の裏であくどいこともやっていたと？　具体的にはあなたのような人を異形と融合させ、逆らえないようにして、非合法な部下にしていた？」
「そうさ」
「こう言っちゃなんだけど、陳腐ね。そもそも、研究自体は合法的にできるはずだけど？」
「だから、杏はイカレているんだんよ」
シージンは感情のままに吐き捨てた後、少し落ち着きを取り戻して言う。
「……ただ、あの女が異形細胞の研究に熱心なのは事実だ。阿久津みたいにまともな奴にすれば、合理的な説明を付けたがるのも無理はない。実際、アタシへの融合実験は、異形細胞の最先端研究だったろうし、飛天市攻略戦で無料救命活動を続けたのも、後のための売名行為に加えて、臨床経験を積むためだったとすれば、説明はできる」
「成果は？」
「上がっている。上がらなきゃおかしいさ。聖人づらしている裏で動物実験を省略して、いきなりフェイズ２の人体実験をしているんだからな。おまけに表では【紅玉の杏（あんず）】として、演算結晶によるシュミレーションの優先権を持っていやがる。実際にお前も見たろ。あの触手の羽根を――」
「あの異形の触手が……羽根の形をとるというの？」
「ああ、しかもあれは能動的（アクティブ）な防弾装置として機能する」
「そういえば、こっちの攻撃は防いでいたわね。でも、銃火器なら……」
「少なくとも、以前、杏についていけなかった奴が９ミリ拳銃を目の前でぶっ放した時、あの女は無傷だったよ。弾倉が空になるまで連射し続けたのにな」
「マジ……って、その杏に刃向った奴はどうなったの？」
「あの触手に全身の骨を砕かれて死んだ。手足の先から一本ずつ、じわじわとな」
「……こ、攻防一体ってわけね……」
「冷静に考えれば、見せしめも兼ねていたはずだ。さすがにあの触手が絶対無敵だとか、杏が不老不死だなんてありえない。今日も煙幕の方は効果があったんだ。倒す方法はある。あるはずなんだ」
シージンは震えながら、己に言い聞かせるように繰り返した。
そして、己の――異形細胞に覆われた――顔を両手でぴしゃりと叩いて、震えを止める。
「お前は『融合式異形被験者』であるアタシを『部分甲冑式異形使役者』と言ったよな。だが、『部分甲冑式異形使役者』と呼べるのは、むしろ、あの【紅玉の杏（あんず）】だよ」
「……」
――甲冑式異形の形状を、全身甲冑ではなく、部分甲冑にすればいいのではないか？

という発想自体は昔からあったらしい。ただし、現実にはあまり普及しなかった。

理由はいくつもある。元々《幻想円盤（イマジナル＝ディスク）》はその名の通り、昆虫の《成虫原基（イマジナル＝ディスク）》が由来であり、自然と完全変態になりがちである事、ＩＧＦＴＥＬ（イグフテル）などの神経系初期化剤を用いて、運動野を再構築するにせよ、その操作系は先読み式主従追随（プレディクティブ／マスター／スレイブ）を基本とするため、あくまでヒトの四肢の延長である『全身甲冑』でなければ、不都合である事などなど……

つまるところ、その性能が極めて中途半端なものだったからだ。

しかし、【紅玉の杏（あんず）】は何らかのブレイクスルーに達したらしい。

今考えてみれば、あたしが杏と出会った時、彼女は自律式異形を眠らせていた。あれもガスなどではなく、本当はもっと別の異形技術だったのかもしれない。

「……とりあえず【紅玉の杏（あんず）】は常識の数段上をいく戦術異形技術を駆使する。それは間違いないのね？」

「ああ、しかも、現行の技術規制の抜け道をついてきやがる。『部分甲冑式異形』がその典型だな。……アタシ一人じゃあ、手に負えない」

「ははーん」あたしは浅瀬に立って、腰をかがめ、両手を組み、胸の谷間を強調する。

「そこでこの天才美少女キャロット・マリオンの力を借りたいわけね？」

「いや、どちらかと言うと、松前汀の太刀筋に期待していた」

「ぶー」

あたしは思わず頬を膨らませたが、シージンの言いたい事はわかる。

たしかに、あの汀の刃圏にさえ入れば、【紅玉の杏（あんず）】であろうとも触手に構わず、両断できる気がする。

「あ、汀と言えば、あの大きな結晶細胞は？」

「詳しい事は知らん」

「演算結晶じゃないの？」

「アタシも同意見だが、中身はやはりわからん。杏の命令で探していただけだからな」

シージンは肩を竦める。

「ただ、杏にとって、重要なものであるのは間違いなさそうだな。あいつにしては珍しく御執心だった。……だから、これは好機だと思った。お前を助けたのもそのためさ」

「好機？」

「ああ。まず、お前に恩を売る事で、松前汀の協力を得られれば、杏を殺す切り札になりえる。そこまで行かなくても、松前汀に結晶細胞を死守してもらえれば、それだけで杏の大きな損失になりえる」

「あたし自身の存在は二の次？」

「繰り返すが、あのままだと、お前の身体もあの女の玩具にされていたぞ？」
「……はいはい、ありがとう」

＊＊＊

そして、翌日の山林の中――。

日が中天に上った辺りから、自律式異形が襲撃してきた。
午後一時にも襲撃してきた。午後二時にも襲撃してきた。午後二時三十分にも襲撃してきた。
それも、蜥蜴擬き（トカゲモドキ）の名で毎度おなじみ蜥蜴型だけではない。
二速歩行する竜盤型（人間大のティラノサウルスを連想してもらいたい）。
さらには蝙蝠型（その名の通り、コウモリに似ており、限定的ながら飛行可能だ）。
……すべて自律式異形とはいえ、数も質も大したものだ。
いや、いずれもあたしが華麗に撃破しているんだけどね。
「というか、シージンっ、あんたも手伝いなさいよっ！」
「そう言われてもな。アタシの射程へ入る前に、お前さんが全部撃ち殺すじゃないか」
「だって、近づかれたら、危ないじゃん！」
そう、それが現状だった。色んな種類の異形が来るのだが、あたしには予めその位置がわかっている。間合いを測り損ね、痛打を食らった反省もある。だから、あたしは異形が有効射程に入った瞬間に撃ち殺している。
しかしそうすると、シージンは突っ立っているだけになるのだ。
おまけにまた新しい気配が来た。
「うう、蜥蜴擬き（トカゲモドキ）の群れに竜盤型が混じってるー。あいつら嫌だよー。弾が通りにくいー」
あたしはつい泣き事をこぼす。
竜盤型とは言わば、拠点防衛用自律式異形であり、やたらと装甲が頑強な上にぶ厚い。
並みの拳銃弾ではマジで歯が立たない。あたしのＦＮ－Ｐ９０は５．７×２８ミリ弾なる事実上のライフル弾仕様だから、何とかなっている。が……何とかなっているだけで、色々と面倒なのだ。
すると、シージンが一歩前に出る。
「そうか、なら、アタシが行こう」
「え？」

「泣き言をこぼすのは、残弾が怪しくなっているからだろう？」
「……」
「アタシは相手を引きつける流儀だが、まあ、心配しないで見ていろ」
シージンはそう言って、自律式異形の群れの方へ向かう。
とっくに射程距離なのだが、シージンの忠告通り、あたしは手を出さない。
「蜥蜴型四匹に、竜盤型一匹だな？」
「ええ……」
合計五匹の自律式異形が木の陰からはっきりと姿をあらわす。
竜盤型異形は、その名の通り、竜盤目獣脚類を参考に開発され、二足歩行する大型肉食恐竜……それこそティラノサウルスに近い体型だ。勿論、十メートルを超える体躯を再現するのは困難なため、全長は二メートルほどに抑えられている。腕も大きく、姿勢はほぼ直立。一見した印象はヒト型に近く、警備員がわりにも使われるらしい。
実際、蜥蜴型と違って、直立するために前方投影面積が大きくなり、二足歩行するため移動速度を犠牲にしている。だから、兵器としての汎用性は低い。しかし、その分、攻撃力と防御力に優れるため、拠点防衛用としては重宝されている。
勿論、異形細胞らしく、剥き出しの筋肉と脈打つ血管、巨大な爪と牙は目立っており、これがまた威圧感を与えるのだ。
――そんな竜盤型の周りを蜥蜴型四匹か……。
まるで、中世の騎士と従士のような陣形だった。
シージンはそんな異形の群れにスタスタと近づいていく。
当然、蜥蜴型が一匹また一匹と襲いかかった。
しかし、シージンは腰から大振りのククリ――いわゆるグルカナイフを抜くと、空高く跳躍する事でそんな蜥蜴擬き（トカゲモドキ）の爪を躱す。そしてそのまま、蜥蜴型の脊髄を力任せに叩き斬る。
凄まじい身体能力だ。あれは比喩抜きで異形の力なのだろう。
――でもあれは……。
「ハッハァ！」
シージンは狂気の笑いと共に、さらに別の蜥蜴擬き（トカゲモドキ）へ飛びかかり、これもククリの刃で空竹割りにする。
――ちぐはぐだ。
あたしは正直そう思った。シージンの腕前も大したものだが、汀の様な優美さがない。
これは見た目の問題ではない。動きに無駄が多いという意味だ。

また別の蜥蜴型がシージンに襲いかかる。単調だが、それが自律式異形の特性である。だから、シージンは再び跳躍で回避し、最初の一匹と同じように脊髄を力任せに叩き斬る。

……今のも汀なら、あんな大きく飛び跳ねない。横へ一歩動くだけで回避し、そのまま相手の勢いを利用して、横薙ぎに両断する。

汀の様な凄腕と比較するのは酷かもしれない。汀は汀で、シージンの様に異形の爪牙をあれほどの跳躍で回避する事はできないだろう。

――でも、あの戦い方だと……。

あたしが不安になっていると、シージンはまた蜥蜴擬（トカゲモドキ）きの一匹を空竹割りにした。

が、その隙をついて、また別の蜥蜴擬（トカゲモドキ）きがシージンの顔面に飛びかかる。

シージンは左腕で庇ったが、同時にその肘を噛まれた。

――やっぱり、多勢に無勢だと、無理が出た……！

あたしはＦＮ－Ｐ９０を抜きかける。

だが、シージンは相変わらず平然としていた。

蜥蜴擬（トカゲモドキ）きは蜥蜴擬（トカゲモドキ）きで、彼女の腕を噛み切ろうとする。当然のように離れない。

そして、それが蜥蜴擬（トカゲモドキ）きの仇になった。

今更ながら気付いたが、シージンの白のアバーヤは一式まとめて防弾紡刃繊維らしい。

蜥蜴擬（トカゲモドキ）きの鋭い牙でも、易々とは貫けない。

しかも、仮に防弾紡刃繊維を貫けたとしても、その先にあるシージンの肌はそれ自体が異形細胞による装甲なのだ。

つまり、事実上、シージンは無傷。

結局、シージンの左腕に噛みついたままの蜥蜴擬（トカゲモドキ）きは、シージンが無造作に振り降ろすククリに両断されたのだ。

――……なるほど、あれが異形細胞と融合したもう一つの成果か。

忌むべき異形の肌だが、それ自体が装甲になっているから、多少の攻撃は無視できる。

それを隠すためのアバーヤも防弾防刃にすれば、防御力はさらに向上する。

シージンが汀の様な『技』に頼らないのも、圧倒的な運動能力と耐久力を活かすための、彼女なりの工夫なのかもしれない。

実際、最後の竜盤型にも、シージンは冷静に対処した。

竜盤型の鋭い爪が降り降ろされるのを、シージンは右手のククリで受け止める。

さらに左手で、腰から大型拳銃を抜く。

――あれ、Ｓ＆ＷのＭ２９？

シージンはそのリボルバーマグナムを、竜盤型の口の中に左腕ごと突っ込む。

そのまま、発砲。

いかに竜盤型が堅牢な装甲を誇るといっても体内なら話は別だ。まして、単純な構造の回転式拳銃（リボルバー）は異形の体内でも確実に作動し、象や熊をも撃ち殺せる増量強装弾（マグナム）の破壊力を十二分に引き出す。

竜盤型はガクガクと震えた後、バタンと倒れた。

――だから、リボルバーマグナムなんだ……。

あんな使い方をするから、オートマチックより誤作動し難いリボルバー、ライフルよりとり回し易いマグナムなのだろう。

「……今時、回転式拳銃（リボルバー）や増量強装弾（マグナム）なんて、馬鹿げていると思っていたけど……」

「たしかにマネはしない方がいいだろうな。異形に腕をかまれても平気で、反動に片手で耐えられる融合式の特権というわけだ」

シージンがニヤリと笑う。

すると、強引に叩き斬られた蜥蜴型と、内側から撃ち抜かれた竜盤型が、ほぼ同時に【融解】を起こす。結局、シージンは一人で自律式異形五匹を、水と窒素と二酸化炭素へ変えたのだった。

「杏も焦っているのかもしれないな」

その上でシージンは推測した。

「竜盤型はこういう探索には向いていない。一方で蝙蝠型は規制も厳しく貴重な存在だ。それをこうも散発的に使ってくるのだからな」

「おまけに人的資源も投入しているだしね」

あたしはある木の陰に視線を向ける。周囲よりも群を抜いて幹が太くて背も高い、異常伸長した樹だった。

「で、そこに隠れている人、出てきなさい」

「やれやれ。僕は自律式異形でケリを付けたかったんだけどねぇ」

そう言って、陰から出てきたのは、大柄な全身白ずくめだった。

最初の頃のシージンと同じだ。推定『彼』は顔も体も白衣で覆っている。違いと言えば、声がおっさんである事、シージンより大柄な人物である事、そして、何か大きなものを背負っている事だ。気配からして金属のようだが、白い外套で隠れていて、あたしにもよくわからない。

「肥土（ひど）か……」

一方で、シージンはこの肥土という男？とは知り合いらしい。
「貴様がアタシに勝てると思うのか？」
「まともにやれば無理だろうねぇ」
「だったらアタシの前から……」
「だから、これを借りてきた」
肥土はシージンの言葉を遮って、白い外套を翻す。
その下には六本の銃身があった。それぞれの長さは一メートルを超え、弾帯（ベルトリンク）で肥土の背中に繋がっている。そう、彼が背負っていたのは大容量の弾倉だった。
つまり、これは……！
「回転式機関銃（ガトリングガン）っ！？」
「うん。アメリカ陸軍でいうＭ１３４、アメリカ空軍でいうＧＡＵ－２Ｂ／Ａ、アメリカ海軍でいうＧＡＵ－１７／Ａだよ」
肥土は自慢げに語る。……いや、実際これは脅威なので、あたしも補足説明してやる。
「……ゼネラル・エレクトリック社製『ミニガン』……！」
「あれのどこが『ミニ』なんだよ？」とシージン。
「航空戦闘機なんかに使われるＭ６１Ａ１バルカンを小型軽量化したから、『ミニガン』。実際、口径が２０ミリから、７．６２ミリへと大幅に下がってはいるわ」
「だが、あの大きさは機械化部隊用だろう？」
「繰り返すけど、７．６２ミリＮＡＴＯ弾仕様だから、ギリギリ人間でも扱えるらしいわ。とはいえ、それは机上の話。マンガやラノベならともかく、現実に一個人が実戦運用するなんて、ありえないって思ってもいた。理由は……」
「……言わなくてもわかるさ。携行性その他が悪過ぎるんだろう。もっとも……」
「異形細胞による筋力補助があれば、話は別というわけね？」
こんな男の顔には興味がなかったものの、白い頭巾から垣間見える頬はたしかに人外の肌だった。
全身から発せられる気配の特殊さも、雌雄の差を除けば、シージンと一致する。
「つまり、この男も『融合式異形被験者』……！」
あたしの指摘をシージンは否定しない。
肥土自身はむしろ自慢げに語る。
「ふむ、戦力差は理解してもらえたようだね？」
「……」
あたしは言葉に詰まっていた。

現実はマンガやアニメとは違う。

拳銃（ハンドガン）と小銃（ライフル）で撃ち合えば、まず小銃（ライフル）が勝つ。何故なら、拳銃（ハンドガン）が護身用であるのに対し、小銃（ライフル）は戦闘用だからだ。拳銃（ハンドガン）の長所とはその携帯性にあるのであって、純粋な戦闘力では小銃（ライフル）の足元にも及ばない。それは生身の歩兵が戦車に敵（かな）わないのと同じだった。

あたしの主兵装のＦＮ－Ｐ９０も同じだ。短機関銃として傑作だが、それはあくまでも短機関銃としての話だ。携行性等を含めた総合性能で優れているのであって、純粋な戦闘能力では回転式機関銃（ガトリングガン）の足元にも及ばない。

これは歩兵が戦車と戦っても勝てないのと同じ理屈だ。いや、実際、あたしのＦＮ－Ｐ９０が歩兵用の装備であるのに対し、あの『ミニガン』はそれこそ戦車などに装備される代物である。

シージンを横眼で見ても、そこには焦りの色がある。

当然だ。何しろ、あの『ミニガン』は７．６２ミリＮＡＴＯ弾を毎秒百発発射するのである。被弾すれば、痛みを感じる間もなく死ぬ。だから、あの『ミニガン』は『無痛銃（Painless gun）』とも呼ばれる。

シージンの肌は細胞段階で異形の装甲となっている。防弾繊維を着こんでもいる。その防御力は蜥蜴型や竜盤型との戦闘で証明済みだ。しかし、しかしである。毎秒百発の７．６２ミリＮＡＴＯ弾に耐えれるはずがない。

「……」

逆に、あたしたちの武装で、肥土を無力化するのは難しい。

肥土が全身を覆っている白ずくめも、シージンと同じ防弾繊維だろう。それを貫いても、やはりシージンと同じように異形細胞の装甲が待ち構えている。いや、体格を考えれば、肥土の方が装甲は厚いだろう。

なのに、あたしのＦＮ－Ｐ９０の５．７×２８ミリ弾も、シージンのＳ＆Ｗ－Ｍ２９の４４マグナムも、７．６２ミリほどの威力はない。連射性能も、『ミニガン』には大きく劣る。

勿論、隙をついて撃ち込めば、何となるかもしれない。が、相手も移動するだろうし、そもそも７．６２ミリＮＡＴＯ弾を毎秒百発撃ってくるのである。

攻守ともにこちらが不利だ。

「……『ミニガン』なんて、よくそんなもの持ち込めたわね」

「いやいや、お嬢さんのＦＮ－Ｐ９０に比べれば、弾薬の互換性も高いんだよ」

肥土はさらりと言う。あたし達の装備を把握している事と、肥土自身の残弾がたっぷりある事を示唆したのだ。

「さて、シージン、君は杏さんのお気に入りだ。そちらもお嬢さんもいい身体をしている。双方共に殺したくはない。大人しく投降してくれないか？」

そう言って、肥土は舌なめずりをする。

うえええ……。

そういうのはあたしみたいな超絶美少女か、汀みたいな素敵なお姉さんがするからこそ、魅力的なのだ。顔が見えないとはいえ、推定おっさんがやっても気色悪いだけである。

しかし、この肥土がべらべら喋っていたのは、伊達や酔狂ではなく、あくまでも脅迫のためらしい。

つまり、この肥土はこれだけ優位な状況でも、冷静さは失っていない。

いや……そんな男だからこそ、【紅玉の杏（あんず）】も、彼を融合式異形被験者にしたのだろう。

「肥土、知っているか？」

と、シージンはそんな肥土へ言い放つ。

「貴様のそういう下品なところが女に嫌われるんだぜ」

「じゃあ死ね」

肥土が淡々と引き金に指を賭ける。

しかし、次の瞬間――。

発砲直前の『ミニガン』の基幹部分が真っ二つになった。

さしもの回転式機関銃（ガトリングガン）もこれでは意味をなさない。いくら引き金を引いても、銃身ごと斜めにずり落ちる。

よし、時間稼ぎ成功。

「なん……だと……！？」

肥土もさすがに冷静さを失い、漫画みたいな台詞を吐いた。

あたしがべらべらと銃器解説をしていたのもこのためである。決して、あたしがオタだからではない（念のために言っておく）。

その偉業を成した人影が軽やかに言う。

「待たせたかしら？」

「ええ、汀（みぎわ）、待っていたわ」

あたしはその名を呼んでいた。

黒髪ポニーテール、長身痩躯、ブレザー服帯刀女子高生。

すなわち、松前汀（まつまえみぎわ）である。

昨日のうちに、携帯端末で連絡済み。そもそもここが合流地点だったのだw